

が強い。しかし、どのような土木工事も物を造るという面では共通している。そして、その中には大なり小なり人々の夢、願望が託されているものである。その夢を感じ、実現に向けて努力するのは勿論であるが、さらに、自らのうちに夢を育くむことが、土木技術者の生きがいと誇りにつながるものと思う。夢を育くみ大切にできるようになるためには、仕事に追われる日々のうちにも、常に“遊び心”，すなわち心に余裕を持つことが必要ではないだろうか。

私は今の職場に替わるまでの十数年間を振り返ってみて、この“遊び心”というものは自己の技術がある程度研かれ、仕事に自信を持ち始めた頃に生まれたように思われる。われわれ、第一線で働く土木技術者は、工期あるいは住民対応に追われ、“遊び心”を見失いがちである。忙しさに負けてはいけないと思う。

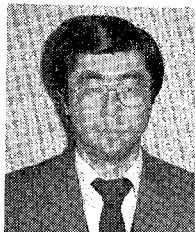
今の私は、幸いにも *Civil Engineer* として大きな夢を実現する仕事に携わっている。

これまでの体験を生かし、着実にこの夢を育てなければならぬと思っている。

(筆者・Yasuhisa WATANABE, 正会員 工修 名古屋市長  
総務局企画課主査, 派遣先: (財) 中部空港調査会)

## 土木行政に PR 活動を

安 田 賢 二



土木行政に携わっている技術者として、今日求められている大切な事柄は、いったい何であろうか。

世の中のあらゆる産業や文化が、日進月歩している中で、いわゆる「土木」に関する分野だけが、勘や経験や前例のみで事業を行っていくわけにはいかない。当然すぎることであり、実際には、何らかの工夫をしたり必要な検討を行ってきた。にもかかわらず、近年の土木行政は、何度も住民反対運動や建設後の公害問題等、様々な問題点の指摘を受けているのが実状である。これらの問題点について、一人の土木技術者によって解決できるものではないが、少なくとも土木行政マンとして改善できるところから取り組む必要があろう。

ところで、世の中に役立っている土木構造物は、無数にある。当然の事であるが、それらの土木構造物は、土木技術者が計画し、設計し、施工するわけであるが、窮極的には、一般の利用者に便益があり、かつ第三者に迷惑のかからない物を作らなければならない。そのために、今日まであらゆる努力をしてきたことと思う。

しかし、先程も触れたように、種々問題点が起きている。その原因は、政策的に高度な政治的判断の結果、見切り発車していることもあろうし、一概には言えない。

いずれにしても、各担当が限られた時間と費用の中で決定し施行してきていることは思うが、事業を行う場合、もっともっと取り組まねばならない事柄があると思う。

それは、土木行政の PR 活動を行うことである。

世の中に役立つ物を作る目的を、大多数の人々に受け入れられるように、正しい情報を提供することが大切である。情報を提供することによって問題点が指摘され、計画の段階で修正することも可能であろうし、いわゆる住民エゴを監視することにもなろうし、行政自身も常に注目され、事業が促進されると思う。PR 活動をすれば、批判や各種意見が出て、行政マンとしては仕事が一面的にはやりにくくなると思うが、他の分野や別の角度からの検討事項も加味され、特に問題点の多い都市施設においては、都市機能上全体としてより良い施設環境が、創造されると思う。

今日の土木行政マンは、世の中のニーズを適格に掴むための情報収集とその分析を行い、また、PR 活動によって情報を提供し住民のコンセンサスを得ながら、目目細かい対応をする必要がある。

そのためには、土木の専門分野に限らず、他の行政機関との調整や学際的な分野との共同事業によって総合的に対応できるように、フレキシブルな能力を身につける必要があろう。

(筆者・Kenji YASUDA, 正会員 横浜市道路局 道路部建設課)

## 2 年続きのトラ年の始まり

太 田 敏 一

「ハードからソフトへ」。まるでコンタクトレンズ洗浄液の CM のようなこの言葉が、昭和 61 年の始まりと



なった。年頭恒例の市長のあいさつで「今年はハードから、ソフトの充実の年とする」と言ったものであるから、市役所内の土木屋は少なからぬショックを受けた。市長は別に、もうハードは不要だなどと言ったのではないのだが、物を建設することに使命を見出ししているわれわれ土木屋としては、ソフトの充実ということに今一つピンと来るものがないのである。このハード信仰と言った現象は土木屋の宿命であろうか。

この頃では、役所もカレンダーを作るようになっていたが、年末に港湾局が作ったカレンダーの出来栄について評価が真二つに分れた。

それは六甲アイランドと既成市街地を結ぶ六甲大橋が、六甲山を背景に配して撮られた写真で始まっており、私自身は大変すばらしいと感じたカレンダーである。ところが、これは評判が悪いという人がいる。「評判が悪い」というのは自分が良く思っていない時によく使う言い方であるが、その人が言うには、この写真には人間が写っていないと言うのである。なる程私には見事に六甲大橋が写されていると思った写真もそう見れば淋しいようにも思える。カレンダーの出来に良い評価をしない人は皆事務屋であるが、一つの写真に対しても土木屋と事務屋の感覚はこんなにも違うものかとその時痛感した。世間では土木屋以外の人の方が多数派であるから、われわれ土木屋は世の中の多数派とは異なった感覚の持ち主という事かも知れない。

神戸市では、近年ポートセールスという事が強調されており、去年からは土木屋もこのポートセールスの仕事に参加するようになった。土木屋が土木屋の世界だけで安住できるような時代ではなくなっている。もちろん物を建設する技術者の自負は必要であるが、そういう技術者の感覚を持つとともに、さらにより一般の人に近い感覚というものを付け加える努力が、今のわれわれに要求されているのであろう。

タイガースファンの私にとっては、2年連続のトラ年となった今年は、「ハードからソフトへ」の土木屋的解釈を求める1年となりそうである。

(筆者・Toshikazu Ota, 神戸市港湾局  
六甲アイランド工事事務所長)

## 土木と政治

寺西 弘文



今日、国際関係の中で、貿易摩擦の解決のために、内需の拡大が重要な政策課題となっている。その中でも、特に、公共事業ならびに都市開発部門への依存度が高い。ここで言う内需の拡大政策は、短期的政策効果が期待される経済的色彩の強い事業である。すなわち、工学の分野はもとより、大きく政治的（場合によっては国際政治）色彩の強いものである。しかるに、一般的に言えることであるが、公共事業の分野においても、プロジェクト規模が大きくなればなる程、各担当セクションには、政治的手腕が問われてくると思われる。

わが国においては、今日まで、都市開発をはじめとした公共事業では、技術屋集団が指導力を発揮して来たが、その政治的手腕には、若干の疑問の余地が有るやに思われる。

技術屋、特に、土木工学を学んだ者は、その性格上、単なる技術屋で終始したのでは、その社会的使命は全うしかねると思うのである。すなわち、技術的に解決しても、政治的に解決していなければ、そのプロジェクトは机上プランで終り、その政策効果は、何ら見出すことができないのである。

筆者は、先年、アメリカ合衆国のハーバード大学で地域計画研修を受ける機会を持ったが、そこでの中心課題は、“Politics”と“Economics”であった。

わが国の如き社会資本形成上、発展途上国では、今後、技術屋集団が指導力を保持し続けるであろうが、単なる技術的見解のみでは通用しない時代に突入したと思われる。

筆者は、社会に出て、時として政治家、時として学者、時として行政官として、その三つのバランスの上に立って生きようと志して来たが、その生き方としては、誤りはなかった様に思うのである。

土木工学の分野が、Soft Academics として成長することを期待したいものである。

そして Civil Engineering とは、ギリシア、ローマの時代より、その様なものであったはずである。また、